

研究・研修報告書

令和 8 年 6 月 1 8 日

小牧市議会議長 舟橋 秀和 様

会派名 無会派
代表者氏名 清水隆宏

研究・研修の結果を報告します。

記

1 参加議員

清水 隆宏

2 日程

令和 8 年 6 月 1 7 日（水）

3 研究・研修名

名古屋コンベンションホール AI 博覧会 Nagoya 2026

4 会場

名古屋コンベンションホール 3F・4F
（名古屋市中村区平池町 4-60-12）

5 受講の目的

近年、生成 AI や AI エージェントなどの技術革新が急速に進展しており、民間企業のみならず自治体においても業務効率化や市民サービス向上の手段として活用が広がっている。一方で、人口減少や人材不足が進む中、限られた人的資源で行政サービスを維持・向上させることが求められている。

本市においても行政 DX の推進は重要な課題であり、生成 AI の活用による業務効率化、ナレッジ継承、人材育成及び市民サービス向上の可能性について研究する必要がある。

AI 博覧会 Nagoya 2026 は、AI 技術や生成 AI の活用事例を紹介する国内有数の展示会であり、先進企業の実践事例や最新技術動向を調査することで、本市における行政 DX 及び AI 活用施策の検討に資することを目的として参

加した。

6 主な内容

生成 AI 及び AI エージェントを活用した業務効率化、人材育成、ナレッジマネジメント並びに行政 DX への活用可能性について

参加カンファレンス（6 月 17 日）

- ・ 12:00～12:40 A 会場 「自社固有の強みを伸ばす生成 AI 活用」
- ・ 13:00～13:40 B 会場 「AI で実現する、チームの『第 2 の脳』」 豊田通商グループ事例
- ・ 14:00～14:40 A 会場 「生成 AI を活用した相談支援による製薬開発の効率化」
- ・ 16:00～16:40 A 会場 「JDLA：エージェント時代の人材教育」 一般社団法人 日本ディープラーニング協会

○イベント概要

AI 博覧会は株式会社アイスマイリーが主催する国内最大級の AI 専門展示会。東海エリアでの開催は今回が初となる。最新の AI ソリューションと直接触れ合い、ビジネスへの実導入を加速させることを目的とし、AI エージェント・生成 AI・フィジカル AI・業務自動化など幅広いテーマを扱う。約 50 社・約 100 製品が出展。過去の東京開催では 2 日間で 12,154 名が来場した大規模イベントである。

○参加カンファレンス① 12:00～12:40 A 会場

「自社固有の強みを伸ばす生成 AI 活用」

株式会社 SHIFT AI の古賀氏と北氏による製造業の現場で「自社の強み」を AI に搭載する方法についての講演

・ 主なテーマ： プロンプトのテクニックよりも、現場の経験や独自のデータを AI にどう学習させるかに焦点を当てた。問題を解決するため、「現場で培ってきた自社固有の知見や強みを AI にどう載せるか」を最重要テーマとして掲げている。

・現場の課題を AI で解決した改善の事例紹介

（１）現場報告書の自動作成： スマホで現場を撮影し、気づいた点を音声メモで吹き込む。その文字起こしデータと手書きメモを AI に渡すことで、指定の Excel フォーマットに沿った報告書の叩き台を自動生成する。これにより、事務所での打ち直し作業を大幅に削減することができる。

（２）海外クレームの高度分析： 海外製品へのクレームに対し、AI に現地の水質や文化などの「環境要因」を考慮させて分析させた。自社データと AI が持つ世界中の知識を掛け合わせることで、ベテランでも言語化できていなかったレベルの改良案を導き出した

（３）ベテランの「勘」の継承： 人間関係や体力、休暇希望など、ベテランが頭の中で処理していた複雑な制約条件を AI に教え込むこと、これまで 2 時間かかっていたシフト表作成作業が、AI による叩き台の生成と微調整だけで 15 分に短縮された

（４）市民開発による業務自動化： IT スキルのない入社 1 年目の社員が、AI と相談しながら Excel マクロを作成することができる。毎日 30 分かかっていた受注情報の照合・計算作業が数秒で終わるようになり、人間は「ミスがないかのチェック」という本来の役割に集中できるようになった

これらの事例は、指示を待つだけのチャット型 AI ではなく、あらかじめ役割やプロンプトを仕込んでおく「AI エージェント」で実現したとのこと。

最終的には、「現場で汗をかいてきた皆さん自身が、自分の道具（AI）を自分で作り、主役として使いこなすこと」が、AI 時代の新しい働き方であると締めくくった。

○参加カンファレンス② 13:00～13:40 B 会場

「AI で実現する、チームの『第 2 の脳』」 豊田通商グループ事例

【概要】社員約 7 万人が 126 ヶ国でビジネスを展開する豊田通商グル

ープにおいて、Notion を活用した情報集約・構造化に取り組んだ事例。情報探索に費やす時間の削減と、AI による知識活用について紹介。

- ・株式会社豊通シスコムの伊東氏と各務氏による、Notion AI を中心とした AI エージェント活用の立ち上げフェーズに関する講演
- ・主なテーマ：混沌とした情報の海（メール、埋もれたファイル、属人的な知見）を打破し、情報の「資産化」と「探索時間の削減」を目指す。

・改善事例の紹介

（1）プロジェクト管理：散らばっていたエクセルなどの資料や会議録を Notion に一元化。AI が議事録の要約やリスクの可視化、タスク管理をサポートし、情報を一本化した。

（2）市場調査：金属資源部にて、数百ページに及ぶ英語の PDF 資料の解析やニュースサイトの巡回と要約を AI で自動化。これまで情報収集に奪われていた時間を、投資判断などの思考プロセスへシフトさせた。

・今後の展望として情報の「循環」：消えていくメールや会話を、組織で再利用可能な永続的資産に変えていくことを重視するとのこと。

ツール導入そのものが目的ではなく、AI に任せられる仕事は任せ、人間が「考える、対話する、新たな価値を創造する」ことに集中できる環境作りを推進していくと締めくくった。

○参加カンファレンス③ 14:00～14:40 A 会場

「生成 AI を活用した相談支援による製薬開発の効率化」

【概要】人材の流動化が進む中、社内ナレッジの活用による業務プロセス改善を目指し、AI エージェントをベテラン研究員の代わりとして活用することで効率的なナレッジ伝承を実現した事例紹介。

・沢井製薬株式会社の西村氏による、AI を活用した創薬・製剤研究の効率化に関する講演。

・20 年分に及ぶ過去の報告書や当局との承認審査に関するやり取りや

りを AI に学習させ、「ベテラン研究者のような相談相手」を構築。

- ・その結果、情報収集や報告書作成の効率化により、大幅な余剰時間を創出。また、経験の浅い研究者でも、AI を通じて過去のリスク事例（製造工程のトラブルや添加剤の影響など）を即座に把握できるため、初期段階からベテランに近い視点で考察を行えるようになった。

- ・従来は手作業で行っていた製剤レシピの比較表作成を自動化し、ロットごとの品質情報を一元管理できるようになった。

- ・今後の展望；AI が仮説の組み立てから実験計画の立案、さらには自動での報告書作成までを担う世界を目指す。また、デジタル技術によって「考察から計画」のサイクルを高速化させることで、研究者がより創造的な技術開発に集中できる環境が目標であると締めくくった

○参加カンファレンス④ 16:00～16:40 A 会場

「JDLA：エージェント時代の人材教育」 一般社団法人 日本ディープラーニング協会

【概要】生成 AI から自律的に動く「AI エージェント」へと技術が進化する中、働き方と求められるスキルが大きく変わりつつある。企業の現場とスタートアップそれぞれの視点から、これからの時代に必要な人材育成のあり方について論じる。

- ・中部大学の藤吉教授、株式会社ナガラ岡田氏の岡田氏、スカイ株式会社の太田氏による、AI エージェント時代の人材教育と組織体制についてのパネルディスカッション

- ・従来は、「AI を作る層」→「AI を使う層」ではなく、間に「AI を組み込む層」（AI エージェントを構築・運用し、業務に実装する層）が新たに重要となっておりその重要性が高まっている。

- ・「AI を学ぶ」から「AI と働く」へ。 AI は学習の対象から、共創する

パートナーへと意識をシフトさせる必要がある

- ・判断力の重要性が高くなる。AIを活用することでショートカットしてゴールに辿り着ける時代だからこそ、AIが出した答えの正誤や品質を「判断する能力」がビジネスパーソン核心的なスキルになる。

- ・組織の底上げが必要。一部の先進的なユーザーだけでなく、全社員の裾野を広げるための継続的な研修と、トップダウンのメッセージが不可欠である。

- ・スカイ株式会社では全社員 4000 人規模の研修が必要となる。AI 関連の進歩も著しいので、毎週数日どこかで社員のリテラシー向上のための研修を実施している事例が挙げられ、今後いかに効率的かつ確実な全社員の教育を進めていくかが課題であると締めくくった。

- ・中部大学藤吉教授は AI が実装を代行してくれるからこそ、人間には「研究の方向性」を正しく判断する能力や、「研究者としての基礎体力」がこれまで以上に問われていると締めくくった。

7 所感・提言・課題等

本市においても行政 DX の推進は喫緊の課題であり、AI の活用は業務効率化・市民サービス向上の両面から重要な取り組みである。本イベントを通じて得た知見を、市政に活かしていきたい。

「現場で培ってきた自社固有の知見や強みを AI にどう載せるか」「現場の皆さん自身が、自分の道具（AI）を自分で作り、主役として使いこなすこと」という言葉が印象に残っており、AI という道具を使う側の「人」をいかに育てるかという仕組み作りが重要である。セキュリティの観点からは、クラウド型のサービスが小牧市に導入可能かという観点も重要である。

AI 博覧会で紹介された事例を通じて、自治体における生成 AI 活用は、「情報の資産化」、「現場業務の効率化」、「人材育成・知見継承」の三つの方向性が重要であると感じた。

ナレッジ管理：AI を活用した情報集約・ナレッジ伝承は、職員の世代交代

が進む本市においても有効な手法である。

人材育成：AI エージェント時代に対応した職員スキルの向上に向けた研修・教育体制の整備が必要である。

本市においても、過去の議事録や報告書、例規集などを AI が検索・要約できる仕組みを構築することで、ベテラン職員の知識を組織全体で共有し、若手職員の業務支援につなげることが期待できる。

また、施設点検時の音声入力による報告書作成や、市民からの問い合わせ内容の自動振り分けなど、現場業務の効率化にも活用の可能性がある。

さらに、職員自らが AI を活用し業務改善を行う開発者の育成や、全庁的な AI リテラシー向上に取り組むことで、持続可能な行政運営につながるものとする。

導入にあたっては、身近な繰り返し業務からスモールスタートし、効果を検証しながら段階的に活用範囲を広げていくことが望ましい。第一歩としてノーコードアプリの活用を今以上に促進することが望ましい。

具体的には小牧市において以下のような改善の可能性がある。

（１）膨大な過去の議事録、報告書、例規集など様々なデータが蓄積されているが、「ファイルを開いて確認しなければならない墓場」になっている可能性がある。これらを学習させ、「ベテラン職員のような相談相手」となる AI を構築する。

（２）部署ごとにバラバラな書類やファイルサーバーで管理されている情報を、Notion や Google Workspace のようなツールで「信頼できる唯一の情報源（SSoT）」として集約することで、AI がそれらを横断的に検索・要約。探し物にかかる膨大な時間を削減できる。

（３）道路、公園、公共施設などの現場業務や点検時に、スマホで写真を撮り、音声で状況を吹き込むだけで、AI が自動的に点検報告書の叩き台を作成する。現場業務を AI エージェントで効率化。

（４）Web フォーム等で届いた市民の要望や申請に対し、AI が内容を自動

判別し、担当課への振り分けや、一次回答メールの文面提案、担当者へのチャット通知までを自動で行う。

（５）ベテラン職員しか知らない「地域特有の事情」や「複雑な調整業務のコツ」「窓口対応のノウハウ」などを、AIに学習させて残す。

（６）稼働している古いシステムがあれば新システムに移行する際、自律型 AI エージェント（Devin 等）を活用することで、コストと期間を大幅に削減できる可能性がある。

こうした取り組みを推進するには一部の担当者だけでなく、全職員向けに AI 研修を実施し、自発的に「社内エージェント」が作成されるような文化を醸成するため、全庁的なリテラシー教育が必要である。また AI 特有のハルシネーションへの一定の対策も必要である。